

二〇〇四年～二〇一五年「年代順」
古志大文字歳時記

【右大文字】

大文字の寺あをあをと木賊かな

萬燈ゆき

書きにくき松の護摩木や大文字

近藤沙羅

大文字の火床並ぶや山の腹

佐々木まき

火となりて全き姿や大文字

中村汀

大文字ここが天辺草の花

米山清子

燃えながら立ち上がりつつ大文字

木下洋子

大文字の消し炭ひとつ護符となす

大塚直子

大文字吉兆の船あかあかと

丹野麻衣子

大文字の消し炭なりとあなかしこ

大田芳男

大文字妙法その他みな拝む

藪本文子

ぼつぼつと燃えつつやがて大文字

山田寿美子

精霊のぞろぞろゆくや大文字

内田朋子

やがて吾も炎とならん大文字

橋詰育子

ねぎごとは父母の冥福大文字

中西幸雄

舟でみてまた土手でみる大文字

小川もも子

大文字人のせて橋灯りたる

槇山幸子

わが書きし護摩木燃ゆるや大文字

八坂洵

あかあかと昔の色や大文字

本橋康子

大文字消えたる闇もただならね

田宮尚樹

天地の間にかつと大文字

村松二本

草も木も人も仰ぐや大文字

安藤久美

母送る大一文字またたける

近藤沙羅

大文字大いなるまま闇に消ゆ

伊藤昭子

胸に抱く赤子に見する大文字

神蛇広

大文字に門開けくれし嵯峨の寺

氷室茱胡

見てこそそのものを見にけり大文字

石川きよし

闇をきてはるかな闇に大文字

川村玲子

金剛の炎が駆けて大文字

同

大文字や山を離れて浮かびいづ

清田喜代子

大文字敗れし国の天に燃ゆ

山根雪

大文字はるかに火入れまつころ

澤田美那子

大文字妻と来しより十余年

片山ひろし

大文字の護摩木託さる手力男

広岡育子

これやこの小倉山より大文字

丹野麻衣子

あなかしこ大文字の火もその闇も

中村汀

火起こす風すごからん大文字

大谷弘至

大きくてはかなき大の一字かな

同

大文字消えかかりつつ空にあり

同

生き死にも旅の一つや大文字

同

大文字へくそかつらも火の中に

藤英樹

大文字一夜明けたる高野川

横山幸子

屋上に患者も医者も大文字

横井初恵

今宵きて京に一夜や大文字

長谷川權

炎えながら大一文字よこたはる

同

人あはれ牛やあはれと大文字

同

わが上に大文字のただ一字あり

同

岩倉のあたりはしんと大文字

同

火しぶきを上げて燃えつつ大文字

同

大文字一字のための松と藁

丹野麻衣子

付け帯の女学生われ大文字

水岩瞳

百年の松を護摩木や大文字

大谷弘至

廁よりはるかに見えて大文字

同

大文字の炎に籠る僧ならん

同

寿美さんと呼びかけてみる大文字

齋藤嘉子

炭拾ひ一番乗りや大文字

上松美智子

濡れながら担ぐ護摩木や大文字

大谷弘至

大文字ざんざん降りのおとの火よ

同

大文字にねぐら焼かれし鳥ならん

同

火の音かはた雨音か大文字

同

蝙蝠も浮かれて出るや大文字

上松美智子

火をつけて鬼も走るや大文字

丹野麻衣子

汀さんも見上げゐるらん大文字

横山幸子

なまぐさの 一休も来よ大文字

大谷弘至

【左大文字】

施餓鬼寺大文字の火を作りをり

丹野麻衣子

金閣の金より凄し大文字

同

大文字の火の粉をかぶれ金閣寺

大谷弘至

消し炭は名残の左大文字

角野京子

【妙法】

一時に燃え上がりけり妙と法

木下洋子

妙法はたち大文字は上向ける

小泉容子

風が吹くあらおもしろの妙と法

丹野麻衣子

一筆の妙法の火の美しき

角野京子

妙法のどかと坐りて京の空

大谷弘至

妙もまた法も炎の一字かな

長谷川權

妙法の火の香に村はねむりをり

齋藤嘉子

妙法の妙はおみな火ならん

大谷弘至

空あかく南無妙法の火が二つ

同

【船形】

船形の傾ぎて波の高からん

那珂侑子

船形やこの町あげて舟泊

黒部美栄子

音たてて船となりゆく炎かな

大谷弘至

後るるな船形の鉦うちならす

同

つかの間のこの世にかけて炎の帆

同

波乗りの船形に火の入りにけり

長谷川權

船形や大いなる艚のあるごとく

大谷弘至

妙の火を追って船形はしりけり
よき風にのつて船形はしりけり

同 同

【鳥居形】

火床まで火の駆け行くや鳥居形
鳥居形こそ親しけれ嵯峨住まひ
山ひとつ燃ゆるが如し鳥居形
嵯峨の藪燃えんばかりに鳥居形

大塚直子
諏訪いほり
藤英樹
長谷川權

【五山の火】

五山の火鳥居もつとも遥かなり

本橋康子

けふの宿ゐながらにして五山の火

長谷川浩子

【迎へ火】

迎へ火や高灯籠を吊り上げて

中村汀

【門火焚く】

法音寺二十四戸の門火焚く

角野京子

大文字の親火もらつて門火焚く

大谷弘至

【苧殻】

燃え残る苧殻あはれとかき集め

佐々木まき

【茄子の馬】

強さうな茄子を選んで馬二つ

坂元初男

【送り火／魂送り】

化野の千の送り火消えにけり

村松二本

送り火や我が青山は夫のそば

森千尋

送り火の焚き付け藁を負ひ登る

川村玲子

送り火や戦に逝きし幾柱

中村汀

送り火の京の五山の只中に

大谷弘至

大といふ一字を以て送りけり

長谷川權

送り火や人も御魂も雨の中

大谷弘至

さつぱりと山洗はれて魂送り

辻奈央子

魂籠る山を打つ雨十五日

黒部美栄子

雨粒に籠れる魂送りけり

大谷弘至

転生のこよひは仏送る側

同

【燈籠流し】

流灯のひとつ残りて岩陰に

萬燈ゆき

精霊舟水辺の草にかかりけり

齊藤真知子

流灯のしずかな水に乗りゆけり

土志田みほ

数多ゆく燈籠の火のひとつなり

鈴木晶子

流灯の風に吹かれて一列に

水岩瞳

流灯のふたつ添ひゆくあわれかな

横山幸子

燈籠の後れ先立ちながれけり

佐々木まき

燈籠をそつとおろすや水の上に

長谷川櫂

燈籠の蓮華のごとく流れ来し

同

【題目踊】

南無妙法蓮華経や盆踊

木下洋子

きちきちや題目踊の輪の上を

近藤沙羅

妙法と染めて揃ひの浴衣なる

萬燈ゆき

兄の帯つかむ弟盆踊

高橋慧

かなかなも唱和するらし踊りの輪

吉澤花

南無妙法蓮華經浴衣の輪

上松美智子

踊りけりひらりと扇返しては

本橋康子

熱き地を擦つて題目踊かな

中村汀

輪の中へ身を投げ出して踊りけり

長谷川權

妙と言ひ法と応へて踊りけり

村松二本

しみじみと相聞のごと踊唄

木下洋子

妙法の国のはじめの踊かな

大谷弘至

南無妙法幻に人踊りけり

同

踊りけり月の仏は雲の奥

同

【鵜飼】

鵜をのせて鵜匠のかへる鵜舟かな

村松二本

鵜箒を引き回しては火のこぼれ

丹野麻衣子

鵜箒に引き上げらるる鵜を見たり

角野京子

舟べりに花の舞妓や鮎箒

長谷川權

【涼し】

火のさかりかくも涼しや大文字

馬淵民子

船形の掛けて涼しき炎の帆

大谷弘至

【汗】

汗一升かいて大文字待つばかり

那珂侑子

【茄子】

加茂茄子の羽二重焼も大文字

野田翠

【夏陽炎】

護摩木負ひ夏かげらふとなりゆけり

長谷川浩子

【夏花】

すべなくて夏花一籠まゐらせん

中村汀

【蝉】

蝉鳴くや夕べはここに鳥居の火

本橋康子

大文字のあと荒々とのこる蝉

大谷弘至

【残暑】

おもかげのなければただの残暑寺

清水芳郎

駆けつけて護摩木奉納残暑寺

佐々木まき

まだ暑き秋蛤の御門かな

長谷川權

【生身魂】

生身魂つれてはるばる大文字

藤英樹

地獄より暑き京や生身魂

川村玲子

【秋】

如意ヶ岳はやばやと秋来てゐたり

佐々木まき

ゆきあたるはつ秋の山銀閣寺

大谷弘至

火の跡の大文字山や秋の蟬

同

秋立つつや珠の消し炭今年また

齋藤嘉子

銀閣寺裏は切り立つ秋の山

長谷川權

【今朝の秋】

消し炭の御守り軒に今朝の秋

石川きよし

船形の跡くつきりと今朝の秋

森千尋

【新涼】

登りゆく大文字山涼新た

木下洋子

命みな消し炭となり涼新た

大谷弘至

【霧】

朝霧や火の香ただよふ如意ヶ岳

佐々木まき

翠嶂の夜霧は深し大文字

同

【露】

露けさのかたまりならん消し炭は

大谷弘至

朝露か泪か濡れて消し炭は

同

大文字一夜明ければ露の山

藤英樹

【秋草】

秋草の大文字寺を拝みけり

中村汀

【薄】

初薄大文字山に登りけり

近藤沙羅

一夜あけ薄の山や如意ヶ岳

中村汀

【稻】

むんむんと稻の匂ひや大文字

藤英樹

二〇一五年八月

佐々木まき編